

自然界は事実フィット  
(年取るといこと日誌から)

CL教育研究会 遠間美保子  
amhotm@gmail.com <http://docl.jp>



2012/12

樹齢 100 年の桜並木の下を自転車に乗った数人の高校生が通り過ぎる。3、4 人の女子高生の後に 3 人の男子生徒。ひと昔前は男子の後から女子だった。右端の男子生徒が真ん中の友達に「今までありがとねー」と声をかけると、「えっ、俺ってもう死んでんの？」と返答する。大人の固い頭では思いも及ばない、きどらない、ユーモラスなことばのやりとりにも時代の変化を知る。

2013/4/17

近所の奥さんとお隣さんらしき旦那さんが垣根越しに話をしている。白い野球帽をかぶった中高年の旦那さんが「こうこうこう…」と切れ間なく話している。ショートヘアの同年代らしき奥さんが話の途中で、大きな澄んだ声で「よくやったわね！」とはっきり一言相槌を打った。一瞬男性の声が止まったが、しっかり認められて励まされたのか、すぐに話は続いた。人の話をよく聞いてからの一言はたくさんの言葉より相手に意味のある多くをしっかりと伝えると教わった。

4/17

寺院では春の骨董市が開かれ、いろいろな植木や鉢植えも売られている。そこで買った二つの花の植木鉢を重そうに両手に下げた中年の奥さんが手ぶらの旦那さんとすたすた歩いてくる。旦那さんが何かを話しかけた途端、「何か文句あるのっ！」とむっとした顔で奥さんが反応した。旦那さんはぼつが悪そうに黙った。想像だが、奥さんが植木を買うとき、旦那さんがケチをつけたか、奥さんは自分の勝手と好きな植木を買って、ふだんなら旦那さんが持ってくれるのを断って、両手に抱えていたのかもしれない。旦那さんは、「俺が運ぼうか」と話しかけたのに、怒ってる奥さんは、人の買い物にまだ文句があるのかと制したのだろうか。どこの夫婦もホント似ている。似ている様子を他人に見ると思わず笑えるのは、だれも同じ。みんないっしょの落語の世界。

4/26

黄色の木瓜バラが二十坪ほどの庭に、所狭しと塀を超える高さで、中世の貴族の女性が身に着けていたような大きく膨らんだドレスのように地面にたれて咲き誇っている。一分ほど眺めて歩き出すと長い髪をたらし、白地にちらちらと黒の模様が散るチェニックを来た、スレンダーな女性がスマホを見ながら向こうから来てすれ違う。すれ違う一瞬にこちらをちらっと見て、ニコッと笑顔を見せてくれた。美人な上に笑顔も美しい。朝からこんなに美しいご褒美をいただけるとは有り難い。これだからウォーキングは止められない。

5/10

白のシャツに黒のソムリエエプロンをした若い女性二人が、仕事の途中なのか、荷物を載せたスクーターの横で話している。「服を着てしまえば動くんだけど、起きるの辛いよねー」「早く寝たときはそんなにきつくないけど」会話の中に CL のヒントが入っている。でも感情の話の方が会話は弾む。

7/14

早朝 5 : 30、神社境内で黒いサングラスに髪がふさふさの 20 歳前後の男の子と同年代の女の子がチャリンコでウォーキングをする私の横をゆっくり走りぬける。男「～で寝てるときさー『おまえ、ハラ、やばくねー』っていわれた」女「そんなに出不いしー」その会話を耳にして、男の子をよく見るとふっく

らと太り気味。私の年代だと「ちょっと、メタボになってない」と相手に直球を投げつける言葉だが、現代の若者の言い回しは、きれいな日本語とはいえないが、優しい。

7/20

登山のために7月に入ってから800gの重量がある登山靴と古い登山用ストックを両手にウォーキングしている。朝6時、寺院の参道を駅に向かっていていると、後ろから小さな自転車で黒いシャツと裾が大きく膨らんだ真っ黒な左官屋のユニフォームで、髪がもじゃっと膨らんだ、黒い髭も生えてる強面の職人が参道はじを私をよけて追い越した。気づかずにすたすたとストックをついて道幅をとって歩いていたのに。見た目よりずっと優しい気遣いに頭を下げた。

7/22

登山靴でウォーキングしながら、少しでも筋肉ついたらいいなあとか、次に上る山は熊がとても多いところとか思い出したりして、襲われそうになったらと熊が頭に湧いた途端、猫が足先を突然走りぬけ、森田正馬先生の「鳩が足元から飛び立ったら驚く」どおり、びっくりして事実の悪さに笑った。

### 動物生態三体

7/24

(一) 6月朝6時、ウォーキングしている真ん前を突然一羽のカラスがばたばたと横切る。カラスは小鳥を口に銜えている。ギャーギャーという鳥の鳴き声で小鳥が集まってきた。捕まった小鳥はムクドリで暴れている。カラスが銜えきれずに小鳥を口から離すとムクドリは私立高校のフェンスとネットのすき間に逃げ込んだ。カラスは入り込もうと試みたが、体長があって羽根がつかえて難しい。道路の向かい側の屋根上に止まってムクドリを見張っている。

ムクドリの仲間がカラスに捕まった仲間のムクドリを助けようと次々を高い鳴き声をあげて集まり、カラスを威嚇して追い払おうとする。すると別の一羽のカラスが電柱のてっぺんから「ガアー」と脅してムクドリを追い払う。カラスにも仲間が加勢に来たのだ。一度捕まったムクドリはフェンスとネットの狭い隙間の地面にじっとしている。仲間のムクドリたちは啼きながら周りを旋回しているが、カラス2羽は一度捕まえた獲物を諦めそうにない。この後どうなるか、心残りながらその場を去った。

7/23

(二) 寺院の境内はようやくミンミンゼミや油蟬が鳴きはじめた。ムクドリが何かを銜えて地面に降り立つ。木に止まっていたセミだ。バタバタと羽根を羽ばたいて嘴から飛び出そうとするが、ムクドリは獲物に逃げられないようしっかりと銜えたまま。2~6年間も長い年月を地中で過ごし、ようやく地上に出てから一ヶ月内の寿命がさらに短くなったこの蟬の生命。自然界もときどき厳しい。

11/6

(三) 墓地の横に細い通り道があり、道と墓地をブロック塀で途中まで隔てている。塀の向かいには空き家があり、猫屋敷になっている。早朝餌を与えてくれる年配の男性を待って、猫屋敷の前庭や道に数匹の猫がたむろしている。カラスの鳴き声がして、一匹の茶色の三毛猫がブロック塀の中断の10cmほどのへりを急ぐように走って止まる。塀に止まったカラスを見上げて、睨みつけている。猫の足元には餌が置いてあってカラスがそれを狙っているのだ。よこせと言わんばかりに「カアー」と叫ぶ。猫はカラスの方に下から体を伸ばして今にも跳びかからんばかり。「カアーカアー」と啼きながらカラスは猫の睨みに負けて、餌を横取りするのを諦めて飛び去った。

カラスにとっては食を確保するのは「なすべきこと」だが、猫には自分の餌を横取りをする厄介者。猫のなすべきことは餌を守ること。まさに戦いの場になる、相反する目的のぶつかり合いだが、猫は餌を守る目的にそって、跳びかかるとか直接相手を破壊する行為をせず、睨んで餌のそばに座るだけ。建設的な行動の効果あって、カラスは目的を変更して別の方向に向かった。自然界は事実の教えそのままに即している。(千葉県市川市CLインストラクター)